

『天の御国が近づいた』一派遣一 (要旨)

聖書箇所：マタイ10:1~28

【1】 「天の御国」を意識していますか

主イエスは、羊飼いのいない羊のように弱り果てて倒れていた群衆を深くあわれまれました。この深いあわれみが宣教の動機です。イエスは宣教のために弟子の中から十二使徒を任命しました。任命された十二人は、「天の御国が近づいた」ことを人々に宣べ伝えるため派遣されました(10:7)。

「天の御国が近づいた」を「世の終わりが近づいた」と言い換えることができます。

「収穫」とは世の終わりをあらわすたとえです(13:39)。黄金色の麦穂が風に揺れる時期、農業者が天候を見ながら、急ピッチで刈り取り作業を進めるように、収穫のための働き手として十二人を任命し派遣しました。

▷イエスは使徒たちを派遣しました。「天の御国が近づいた」ことを知らずに生きる者たちが、天の御国を意識し備えることができるように。

【2】 救いはユダヤ人に告げられ、そして異邦人へ

イエスは十二人を派遣する際「異邦人の道に行っては行けません…むしろ、イスラエルの家の失われた羊のところに行きなさい」(10:5~6)と言われました。一見、ユダヤ人以外の宣教を禁じているようにも見えます。しかしそうではありません。マタイの福音書全体を通し、私たちは御国の福音が段階的に広がる様を読み取ることができます。

まず、使徒たちが計画しなくても「異邦人に証すること」なるとイエスは言われます(10:18)。次に福音は、それを受け入れないユダヤ人から「神の国の実を結ぶ民」のもとに届けられます(マタイ 21:43)。そして福音は全世界に宣べ伝えられ、すべての民族に証され、それから世の終わりが来ると記されています(マタイ 24:14,28:19)。十二使徒による宣教は、ユダヤ人から異邦人、あらゆる民族、そしてすべての国の人々へと広がって行くのです。

【3】 『天の御国が近づいた』一派遣一

十二人の派遣は危険が伴いました。そのことをイエスはよくご存知でした。「わたしは狼の中に羊を送り出すようにして…遣わします」(10:16)

イエスは十二人に苛烈な迫害を覚悟させました。通常の旅人の装備が、彼らの身の安全と移動を保障するものではないと教えました(10:9~10)。迫害者は「天の御国が近づいた」と宣べ伝えることを妨害するため、虎視眈々と機会をうかがっているのです。イエスは安易に騙されないよう抜け目なく生きることを。ずる賢い策謀に溺れないよう、混じり気のない正直さを持つようにと言われます。「蛇のように賢く、鳩のように素直でありなさい」(10:16)

人は身近な人との良好な人間関係や日々の健康を願います。時の権力者は、そうしたものを人質にして人々を自分の思い通りに従わせようとします。イエスは、そうした支配の枠組みから解放されて生きる道を示しました。「からだを殺しても、たましいを殺せない者たちを恐れてはいけません」(28)。

日々、あなたは誰の目を気にしながら生活しているでしょうか。誰に評価されることを最大の喜びと考えているでしょうか。誰があなたのことを最も愛していると思われるでしょうか。

「私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いたちも、支配者たちも、今あるものも、後に来るものも、力あるものも、高いところにあるものも、深いところにあるものも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」(ロ-マ8:38~39)

